琉球大学学術リポジトリ

ウシのグループ育成を通して見る現代の沖縄闘牛における牛主にとっての闘牛

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2019-04-11 キーワード (Ja): 沖縄島, 闘牛, グループ, 牛主, 楽しみ, bull⊠ghting キーワード (En): Okinawajima, bull-raising group, bull-owners, enjoyment 作成者: 池本, 倫太郎, 松本, 晶子, Ikemoto, Rintaro, Matsumoto-Oda, Akiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002011982

観光科学　第 9 号　（平成 31 年 2 月）pp.21-34
Journal of Tourism Sciences. Vol.9 (February,　2019)

ウシのグループ育成を通して見る
現代の沖縄闘牛における牛主にとっての闘牛

Owners' bullfighting as seen from cooperative bull-raising in the modern Okinawa

池本倫太郎・松本晶子
Rintaro Ikemoto [1], Akiko Matsumoto-Oda[2*]

英文抄録（300 語以内）

Bullfighting in Okinawa, started as farmers' entertainment, was incorporated into annual events and is becoming one of the prefecture's bigger tourism activities. Nowadays, Okinawa is the prefecture where bullfighting is held most frequently. Unlike other prefectures, in Okinawa, it was observed that many persons jointly participate in bull-raising (bull-raising group). It is thought that the success of bullfighting in Okinawa is related to these groups. The purpose of this research is to clarify the benefits of group bull-raising in Okinawa. We interviewed members of one bull-raising group. Our questions were (1) how much did the group reduce the economic burden of the bull rearing, (2) what was the role of the group other than reducing the economic burden, and (3) how was the relationship between the bull-owners and the bulls. Our results showed that the many members reduced economic and temporal costs related to bull-raising. Most importantly, the members enjoyed gatherings for bullfighting.

Key words
沖縄島 , 闘牛 , グループ，牛主，楽しみ
Okinawajima, bullfighting, bull-raising group, bull-owners, enjoyment

1. はじめに

1-1.　世界の闘牛

世界で「闘牛」と呼ぶものには、「牛と人が対峙するもの」と「牛と牛が対峙するもの」の 2 つのタイプが存在する（石井　1992）。前者は、貴族の狩猟を起源とし、人（闘牛士）が牛に剣や槍を刺し徐々に弱らせていくもので、スペイン、ポルトガル、フランス等のヨーロッパの国々やメキシコ、ペルー、ベネズエラ、コロンビアといったラテンアメリカの一部の国々で行われてきた (青木　1998)。後者は、群れ内順位を決めるために角を突き合わせる牛の習性を利用したもので、牛同士の角を突き合わせ、先に逃げた方を負けとするものである。東アジア、南アジア、中近東、南アメリカ北部の地域で行われているようだが、詳しい情報を手に入れることは難しい。日本の闘牛は、後者のタイプである (曽我 1991)。

日本の闘牛は、地域によって開始時期に差はあるものの、鎌倉時代ごろから江戸時代にかけて、農閑期の娯楽として始まったと考えられている（宇和島市観光物産協会　2018）。だが、1960 年代からの農

1 琉球大学観光産業科学部
2 琉球大学大学院観光科学研究科（E-mail: a_matsu@tm.u-ryukyu.ac.jp）

業の機械化によって農耕牛を飼う家庭が減少し、闘牛も減り始めた。日本で現在闘牛が行われている地域は、岩手県久慈市、新潟県二十村郷（小千谷市と長岡市）、愛媛県宇和島市、島根県隠岐の島、鹿児島県徳之島、沖縄県沖縄島・石垣島・与那国島の６県である。そのなかで最も闘牛が盛んに行われているのは、沖縄県だといえる。闘牛大会の年間大会数を比べると、岩手県久慈市、新潟県二十村郷、愛媛県宇和島地方、島根県隠岐の島の４つの地域が10回以下であるのに対して、沖縄は２倍以上の回数があった（表1）。年間大会数がこのように多い理由の１つとして、沖縄県内に13ヵ所の闘牛場があることがあげられる。沖縄島北部に３ヵ所、中部に７ヵ所、南部に１ヵ所、そして石垣島と与那国島にそれぞれ１ヵ所ずつある。

表1.　日本各地の闘牛の様相

地域	闘牛の呼び名	観戦料金	年間大会数	出典
岩手県久慈市	牛の角突き、闘牛	1,000-1,200円	春夏（2回）	1, 2
新潟県二十村郷	牛の角突き、闘牛	屋根のある席は1,000円 屋根のない席は2,000円	9回	1, 2, 3
島根県隠岐の島	牛突き	1,300円ほど	定期大会と（6回） 観光闘牛（随時）	1, 2
愛媛県宇和島地方	闘牛	2,500-3,000円	定期大会（5回） 観光闘牛（随時）	1, 2
鹿児島県徳之島	闘牛	2,500-3,000円	15-20回	2
沖縄県	闘牛、 ウシオーラセー (沖縄方言)	2,500-3,000円	約25回	本研究

（出所）１：宇和島闘牛公式サイト、２：全国東住サミット協議会、３：小千谷市闘牛振興協議会

1-2. 沖縄の闘牛

沖縄の闘牛の歴史について、より詳しく見ていこう。明治期の沖縄県で実施された統治方針の旧慣温存政策が終わる1903年まで、沖縄では庶民は昔ながらの生活様式を維持していた。年間行事のうち、４月の畦払（アプシバラヒ）（豊年祭）、６月の束取（祖先供養の儀式）の翌日である26日、７月の旧盆（精霊の送迎儀式）の16日、に闘牛は各地で行われていたことが記録に残っている（国頭郡教育会 1919，真境名　1967）。農民の娯楽として始まった沖縄の闘牛は、年間行事にも取り込まれ、徐々に興行性を伴いながら発展したようだ（宮城　2010）。牛の種類や品種改良の経緯については、桑原ら（2006）によって報告されている。1961年には県内各地に分散していた闘牛組合が沖縄県闘牛組合連合会を結成し、翌1962年の第一回全島闘牛大会が開催されると、最盛期を迎えた。1964年に全島チャンピオンに輝いた「ゆかり号」はその強さから闘牛会のみなら

図1．石川多目的ドームで行われる秋の全島大会の様子
（2016年11月13日）

ず、巷でも勇名を馳せ、当時孫や子に「ゆかり」と名づけることが流行したという。その後ゆかり号は1968年に敗れるまで、41連勝、27度の王座防衛という金字塔を打ち立て、現在でも「伝説の牛」として語られている。その後も闘牛人気は続き、1990年前後にはほぼ毎週末闘牛大会が行われていた。現在では最盛期ほどの盛り上がりはなくなったものの、2007年に県内で闘牛の最も盛んなうるま市にドーム型の闘牛場（石川多目的ドーム）が完成し、春秋の年間2回行われる全島大会には、約3,500人の観客が訪れている（図1）。また直近では、2018年4月8日に、石垣市にある八重山闘牛場がリニューアルされ、創立55周年を記念した大会が開催された。最近の大会では、アナウンサーによる試合の様子の実況が行われ、闘牛場の入り口に闘牛のルール、技の名前等が記載されたパンフレットが置かれているため、今まで闘牛に触れたことがなかった人々でも闘牛を楽しむことが出来るような整備がなされている。

1-3. 年間大会数の減少とウシの減少

今もなお、人々に親しまれている沖縄の闘牛であるが、1960年頃から1990年頃の沖縄闘牛最盛期と比べると年間大会数は減少しており、近年の年間大会数を見てみると、多くて30回ほどであり、25回を切った年もある（表2）。

年間大会数が減少した理由は分かっていないが、その原因の1つとして、沖縄県内のウシ（注1）の減少が挙げられる。闘牛最盛期の沖縄県内のウシの数の正確な記録は残っていないものの、延べ頭数は1,040頭前後であると推測できる。この頭数は、次のように算出した。毎週末大会が行われていたことから、1年間の大会数を52回とした。1回の大会では一般的に10番の試合が行われ、試合では2頭のウシが闘うことから、1大会あたりのウシの数を20頭とした。一方、2017年の年間大会数は23回であったので、延べ頭数は460頭になる。推測の域を出ないが、大会デビュー前の仔牛や、1年を通して1度も大会に出場しないウシも存在するため、県内のウシは約半分に減少したといえる。

表2．2007年から2017年にかけての沖縄の闘牛大会年間開催数

年	大会数
2007	30
2008	24
2009	30
2010	22
2011	20
2012	23
2013	26
2014	25
2015	26
2016	23
2017	23

（ウェブサイト屋良ビデオより引用）

ところで、沖縄では、肉牛として生まれた牛がウシとして育成される。闘争心の強さや、角の形、体つき等から、闘牛に向いていると思われた牛を去勢せずに、ウシにする（注2）。そのため、ウシの種類のほとんどは、肉牛として畜産されている日本短角種や黒毛和種である。このことから、闘牛に使われるウシの値段は家畜牛の値段の影響を受けるといえる。沖縄県内のウシの減少は、次の2つの原因により牛主をやめる人が増え、かつ新たに牛主を始める人が減ったからではないかと考えられる。1つ目は、仔牛の値段が高騰したことである。1990年の沖縄県内家畜市場における仔牛の平均取引価格は約40万円だったが、2016年には2倍の80万円になっている（沖縄県総合事務局農林水産部　2017）。2つ目は、2006年のアメリカやオーストラリアにおける干ばつや、2007年の欧州東部における干ばつ等によって、ウシの餌である穀物の国際価格が高騰したことである（農林水産省　2016）。つまり、牛主にとっての経済的な負担が大きくなったことがウシ頭数の減少を引き起こしたのかもしれない。

1-4. ウシの育成とグループ

次にウシの育成方法を見てみたい。沖縄県では、ウシは個人又はグループで1頭又は数頭が育成され、ウシを育成する者は牛主と呼ばれる。「グループ」とは、複数人でウシを育成する集団のことである。1つのグループを構成するメンバーの数は、グループによって異なっており、2－3名のグループもあれば、7名のグループも存在する。複数人によるウシの育成は沖縄県以外の地域でも見られ、島根県の隠岐の島では「同好会」と呼ばれる、共同でウシの世話をし、大会に出場させ、綱の取り方を伝授したりする会が存在することが報告されている（石川　2005）。沖縄では牛主の経済的負担を軽減する方法の1つとしてグループが増えていると言われているが、グループに言及した研究は今までなく、具体的に沖縄県内にグループがどれだけ存在するのか、グループで牛主をすることによって具体的にどれほどの経済的負担の軽減になっているのかは報告されていなかった。闘牛の研究が比較的進んでいるのは愛媛県宇和島地方と鹿児島県徳之島であるが、民俗学的、地理学的視点からの研究（例えば、石井　1992、石川 2005）、沖縄・宇和島・徳之島の闘牛の概要の比較研究（西村・桑原・尾崎　2006）、日本・韓国・中国の闘牛の概要の比較研究（例えば、西村・桑原・尾崎　2007）に留まっている。

本研究の目的は、沖縄県において、グループ育成が具体的にどれほどの経済的負担の軽減になっているのか、経済的負担の軽減以外のグループ育成の役割は何なのか、牛主とウシの関係はどのようなものなのかを記載することにより、メンバーにとっての闘牛がどのようなものかを考察することである。

2. 研究方法

沖縄県うるま市に牛舎（図2）を構えるグループRを対象に2016年12月7日から2017年2月18日の間に5回、2017年9月11日から2018年1月22日の間に26回、合計31回の訪問調査を行った。対象のグループRは現在メンバー7人（内1人は石垣島在住）（表3）で、4頭のウシを育成している。夕方のウシの世話が終わった後、メンバーは牛舎内で飲食しながら闘牛の話しをする（図3）。メンバーが夕方ウシの世話をする時点からその場に参加し、聞き取り調査を行った。

表3.　グループメンバーの年齢及び職業

メンバー（全員男性）	年齢（2017年12月当時）	職業
A	57	公務員（市役所職員）
B	57	公務員（消防士）
C	40	自営業（電気関係）
D	54	自営業（建築・土木関係）
E	53	自営業（アルミ販売関係）
F	57	介護士
G（石垣島に在住）	57	自営業（畜産業）

図2.　牛舎の外観（2016年2月16日）

図3.　夕方ウシの世話を終えた後の牛舎内の様子。写真の右奥でメンバーが飲食しながら話している（2016年1月9日）

3. 研究結果

3-1. 沖縄県の牛主の支出

まず初めに、沖縄県の牛主の具体的な支出について見ていきたい。一般的に牛主の支出は、牛主をはじめる時の初期費用と、ウシの育成に必要な月々の費用の 2 種類に分けることができる（表 4)。初期費用は主に、ウシの購入、牛舎の建設、ウシを闘牛場に運ぶ際に必要なトラックの購入、改造等である。闘牛をするにはウシが必要であるが、購入費用は仔牛の場合で 50 － 60 万円、既に大会にも出場していて、戦績の良いウシや、闘牛大会でのチャンピオン経験のあるウシの場合は 500 万円にもなる。次に、ウシの飼育には専用の牛舎が必要である。ウシは暑さに弱いため、風通しの良い牛舎が必要で、電気と水道を通すことはウシの飼育に不可欠である。牛舎内で飲み食いする牛主もいるため、ガスが通っている牛舎もある。新しく牛主をはじめる場合、これらの設備を備えた牛舎を建設する必要がある。牛舎の規模にもよるが、建設には数百万円かかる。ウシを闘牛場に運ぶ運搬用に改造されたトラックも必要である（図 4)。トラックを購入し、ウシを安全に運搬できるように改造し、車検に通す必要がある。B さんが「*うちのは 100 万円くらい。中古でトラック買ったから。全部新品で良いのをそろえてってやると、1000 万円くらいかかる場合もある*」と話していたことから、最低でも 100 万円ほどはかかるようである。

表4.　牛主の支出の内訳とその費用

支出の種類	支出の内訳	費用
初期費用	ウシの購入	仔牛の場合は50-60万円、戦績の良いウシは500万円になることもある
	牛舎の建設	数百万円（牛舎の規模による）
	ウシを運ぶトラックの購入・改造	数十万円-数百万円
月々の費用	ウシ餌代	約7,000円/頭
	牛舎の電気・ガス・水道代	数千円（牛舎の規模による）
大会に出場した際の費用	お祝いに訪れた客の接待費	数万円（規模による）

（聞き取りにより作成）

図4.　闘牛大会当日。牛主たちは改造したトラックでウシを運搬する（2016年10月15日）

ウシの育成に必要な月々の費用は、ウシの餌代、牛舎の電気・ガス・水道代等である。ウシの育成にマニュアルはないため (石川　2005)、牛主によって多少の差異はあるものの、ウシには餌として主に穀物とサトウキビの葉が与えられる。サトウキビの葉は牛主自身が刈ってくることが多いが、穀物は購入する必要がある。また、ウシが闘牛大会に出場した時には、牛主の関係者が牛主のもとを訪れ、盛大にお祝いをする (石川　2005)。その時に、お祝いに訪れた人々を料理や酒でもてなすので、その費用もかかる。次に、牛主の収入について見ていきたい。牛主の収入には主に 2 つある。1 つ目は、闘牛大会に出場した際のファイトマネーである。A さんによると、「*沖縄では、基本的に闘牛大会に参加をすれば、勝敗に関係なくファイトマネーが貰うことが出来る*」。ファイトマネーの金額は、闘牛大会の主催者によって決められるため、大会ごとに異なってはいるものの、相場は 8 － 10 万円である。また、通常ウシは 1 回試合をさせると 3、4 ヵ月休ませる必要があるので、その期間は大会に出場することが出来ない。つまり、1 頭のウシが 1 年間に出場できる試合の回数は多くても 3 回であり、1 頭のウシが 1 年間で得られるファイトマネーは最大で 30 万円ほどである。ウシが闘牛大会にデビューするのは大体 4 歳前後と言われており、例えば 1 歳のウシを購入した場合、闘牛大会にデビューする 4 歳までは、ファイトマネーを一切得ることが出来ない。

2つ目は、ウシの売買によって生み出される利益である。ウシは一般的に1人の牛主、または1つのグループのもとで一生育成されることは極めて少なく、複数回売買される（曽我　1991）。基本的に、ウシは試合に勝った場合は値上がりし、負けた場合は値下がりするので（石川　2004）、ウシを購入して育成し、試合に勝利し、そのウシの買値よりも高い値段でウシを売ることが出来た場合、その差額は牛主にとって収入になる。グループRでのウシの売買の実例を挙げると、グループRには2017年3月に売却したYというウシがいた。ウシYは、まだ仔牛だった頃にグループRが30万円で購入して育成し、数回試合に勝利し、その後50万円で売却された。結果的に、グループRは20万円の収入を得たことになる（図5）。

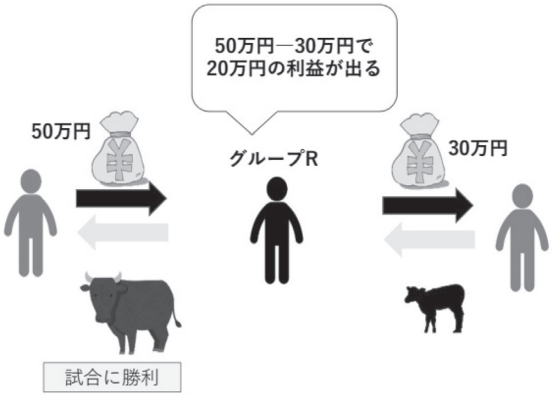

図5.　ウシYの売買による利益創出

➡売買の際のウシの価格、➡ウシの移動　　（聞き取りにより作成）

以上のことを踏また上で、牛主の収支について考えてみる。仮に年間3回闘牛大会に出場して、それぞれの大会で10万円ずつ、合計30万円のファイトマネーを得て、ウシの売買を頻繁に行ったとしても、初期費用に数百万円がかかり、ウシの飼育の月々の費用として数万円がかかる。そのため、Aさんは「*闘牛で儲けてる人はいないはずよ。趣味でやってるから。だからみんなそれぞれ仕事は持ってるさぁね*」と話した。このように、牛主が闘牛で儲けることは難しく、どの牛主にとっても、闘牛の経済的収支はマイナスになっているといえる。また、ウシが試合で大きなケガを負って以後試合が出来なくなってしまったり、試合で負けたことが原因で戦意を喪失してしまったりして、ウシとして使い物にならなくなってしまうこともある（石川　2004）。牛主が試合に勝利することを目指し、ウシに費用と労力をかけて育成を続けたとしても、全てが無駄になってしまうリスクも存在するのだ。

3-2.　グループ育成による経済的負担の軽減

グループ育成によって、牛主の経済的負担はどれほど軽減されているのかを見てみると、まず、多くのグループは、メンバーの1人あたりの飼育数は1頭以下である。例えば、グループRはメンバー7名でウシ4頭を飼育しているため、1人あたりの育成数が0.6頭である。Aさんによると、これはグループRに限ったことではない。そして、グループRでは、メンバー7名全員が月々1万円ずつ、合計7万円をグループRの運営資金としてプールし、会計係であるCさんが管理をする、というシステムをとっている。この他にも、闘牛大会に出場した際のファイトマネーや、グループRのウシを売却した際の売却費等の、収入がここにプールされる。そして、月々の餌代や電気・水道・ガス代、ウシが大会に出場した際の接待費等の支出の全てはここから支出される。全てのグループがこのようなシステムをとっているかどうかは不明であるが、グループRのメンバーの月々の経済的負担は1万円に抑えられていることから明らかなように、グループで牛主をすることにより、個人で牛主をする場合よりも経済的負担が軽減されている。

また、Eさんが「*この牛舎もよ、僕はアルミ屋、こっちは土建屋、電気屋だから。自分達で作ったわけ。*

普通に人に頼んで作ったら何百万もするよ」と話すように、もし個人で牛主をしていた場合に、専門の業者に依頼する必要があることも、グループのメンバー個々の技術を提供することによって、その経済的負担を軽減することができる場合もある。

3-3. グループ育成による労力的負担の軽減

グループ育成は経済的負担の軽減だけでなく、労力的負担の軽減にもなっている。ウシは生き物であるため、毎日の世話が必要である（表5）。牛主は基本的に闘牛以外の仕事を持っているため（石川 2005）、平日は仕事前と仕事後にウシの世話を行う。週末はウシを闘牛場へ連れていって稽古をしたり、高圧洗浄機等を使っての本格的な牛舎の掃除をしたりといった仕事のために、ほぼ終日がウシの世話に費やされる。個人で牛主をする場合、これらのウシの世話を365日休むことなく、1人で行わなければならない。旅行には行けず、仕事の後友人と会ったり、家族と家でゆっくりと過ごしたりする等の時間を持つことも難しいだろう。また、万が一身内に不幸があった場合や、牛主自身が事故にあったり、病気になってしまったりした場合、どうすることもできない事態に陥る。

表5. ウシの毎日の世話と一頭に要する時間及びその内容

世話	1頭に要する時間及び1日に行う回数	内容
散歩	30-60分、1回	ウシに手綱をつけて、道路を歩かせる。平日は早朝に、週末は午後に行う。大雨でない限り行う。
ブラシ掛け	10-30分、数回	牛の体表の垢を専用のブラシで取る。
餌やり	1分、数回-十数回	主に穀物と水を混ぜたもの、サトウキビの草を与える。牛舎にメンバーがいる時は、ウシが食べるかぎり与え続ける。
牛舎の掃除	10-20分、1回	箒と塵取りを使った床の掃除、ブラシを使った餌の容器の水洗い等。
糞尿の処理	5分、数回-十数回	牛舎にメンバーがいる時は、ウシが排泄する度に掃除をする。糞尿は肥料になるため、畑を持つ人が定期的に取りに来る。
餌用のサトウキビの草刈り	30-40分、朝夕の2回	牛舎の近くの草原で餌用のサトウキビの草を刈り、トラックの荷台に乗せ牛舎に運ぶ。

（聞き取りにより作成）

しかし、メンバーで毎日のウシの世話を分担することによって（表5）、個人で牛主をするよりも、牛主の労力的負担を軽減することができていた（表6）。表6の観察を行った2017年10月31日は平日で、メンバーにとっては一般的な日である。午後の世話に注目して見ると、メンバーは各々の仕事が終わった午後5時半頃から牛舎に集まり出す。Eさんが午後5時半に初めに牛舎に到着し、牛舎の扉の鍵を開けた（注3）。ウシの様子を確認した後、Eさんがまずウシの糞尿を処理し、その後牛舎内の掃除を始めた。その間に、Bさん、Fさんが到着し、Bさんは軽トラに乗り、サトウキビの草刈に出かけ、FさんはEさんと共に牛舎内の掃除を始めた。しばらくして、サトウキビの草を刈り終えたBさんが牛舎に戻り、荷台一杯に積まれたサトウキビの草を牛舎内に移し、ウシに与えた。午後6時半ごろ、一通りの世話は終了する。ウシの世話をしている間、メンバーは雑談のような会話は一切行わず、各自が自分のやるべきことを黙々とこなしていた。ウシの世話が終わると、メンバーは酒の用意をし、飲み始め、闘牛の話しなどで盛り上がった。その他のメンバーも順に牛舎に集合したが、この日Aさんは用事があったため牛舎に来なかった。酒を飲みながら闘牛の話をしている間も、サトウキビの草が無くなれば、それに気づいたメンバーが補充し、ウシの糞尿が出れば、それに気づいたメンバーが処理した。

表6. 2017年10月31日（火）のメンバーによるウシの世話の分担

時間帯	世話の内容	おこなったメンバー
6:30-8:00の世話	ウシの散歩	A
	餌用のサトウキビの草刈り	B
	牛舎の掃除	D、E
	糞尿の処理	D、E
	餌やり	B、D、E
17:30-18:30の世話	餌用のサトウキビの草刈り	B
	牛舎の掃除	E、D
	糞尿の処理	F
	餌やり	A、E

（観察により作成）

2017年10月31日にAさんが用事で牛舎に来なかったことからわかるように、全員が毎日牛舎に行ってウシの世話をする必要はなく、仕事が長引いた場合や、何か用事がある場合は他のメンバーに任せることが出来る。その他の例を挙げると、2017年11月15日にAさんは家族で2泊3日の福岡旅行に出かけた。その際Aさんは、「*他のメンバーがいるから、安心して旅行にも行ける。1人でやってたら行けないさあね*」と話した。また、2017年12月21日には、餌用の草刈りの担当であるBさんは那覇で会食があり、そのまま那覇に泊まる、ということがあった。その際にBさんは「*悪いけど、朝の草刈お願いね*」と、朝の草刈りをCさんに依頼し、Cさんは「*うん、大丈夫よ*」と快く引き受けた。Aさんが、「*やっぱりグループは労力的に楽。何かある時も、他のメンバーに頼めるし*」と話すように、グループで牛主をすることによって、メンバーはそれぞれ自分の時間を持つことが出来るのである。

また、ウシの世話をメンバーで分担することにより、あるメンバーが不得意なことや技術的に難しいことを他のメンバーに任せることが出来る。例えば、Fさんは「*朝の散歩は時間的にも合わないし、技術的にもできない*」と話した。ウシは基本的に牛舎の中で繋がれている状態なので、毎日の散歩は、運動も兼ねた非常に重要なものである。しかし、ウシの散歩は犬の散歩のように、誰にでも出来る簡単なものではない。ウシの体重は仔牛でも400kgほどあり、既に大会にデビューしているウシの中には1tになるものもいるからである。そんなウシを手綱1つで散歩させるには、技術が必要だ。

3-4. 試合までの緊張と興奮の共有

グループ育成は経済的、労力的負担を軽減する以外にも、Aさんが「*やっぱりグループでやってる方が楽しい。一人だと寂しいし、大会までの張りつめた緊張も みんなで共有できる*」と話したことからわかるように、試合までの緊張と興奮を共有するという役割があった。

牛主達は大会に出場し、試合に勝利することを目標に、日々ウシの世話に励んでいる。基本的に、大会へは試合相手が決まらない限り出場することはできない。一般的に、試合相手を決めることは容易ではない。お互いの牛主が「このウシとなら試合をしてもいい」という合意が必要なのである。牛主は相手のウシがどういう性格のウシなのか、過去の試合はどういう内容だったのか、自分のウシと角の形の相性は良いのか悪いのかを研究し、自分のウシに勝ち目があると判断した場合、試合の合意をする。だが、自分のウシがとにかく試合に勝てば良い、というわけではない。Fさんが「*プライドもあるし、小さすぎるのとはやりたくない*」と話し、Dさんが「*こういうのを全く、って言う。全く勝てるって意味。全くと組んだねえ、って言われるわけよ*」と話したことからわかるように、自分のウシよりも体の大きさが小さすぎると組めば簡単に勝てるため世間体が良くない。逆に、自分のウシよりも体の大きいウシに勝てば、評判は良くなる。牛主は、自分のウシと体の大きさが同じくらい、又は自分のウシよりも大きいウシの中から、自分のウシが勝てそうなウシを選ぼうとするのである。

このように、試合相手の選定という長いプロセスを経て初めて、ウシは大会に出場することができる。そのため、Fさんが「*組み合わせが決まった時からワクワクする。やるとき（試合の時）はやっぱり楽しいけど、やる前から楽しい*」と話したように、メンバーは試合が決定すると、興奮し、緊張していた。この興奮と緊張はグループで共有されていた。2017年11月16日に牛舎を訪れた際、ずっと相手を探しいていたが、なかなか見つからなかったグループRのウシTにやっと相手が見つかり、メンバーは喜んでいた。Tは体重850kgほどのウシで、グループRが購入したばかりだった。そのため、メンバー

はまず初めに全島大会ではない小さな大会で勝利させたいと考えていたが、適当な相手が見つかっていなかったのである。A さんは「*いやー、決まってよかった！*」と話し、B さんは「*あっち（試合相手の牛）の方が 200kg も重いわけよ！*」「*相手の（ウシ）の映ったビデオあったか？*」と興奮しながら話した。その日は、相手のウシのそれまでの戦績の話しや、T と相手のウシとの相性、T にどういう闘い方をさせるかの会話で持ち切りだった。この時、メンバー全員が相手のウシに関して同じ情報を持っているわけではなく、会話をすることによって情報はメンバーの間で共有されていた。会話の最中、メンバーは皆、試合相手が決まった喜びと安堵感、緊張感を表情に滲ませ、興奮している様子だった。

そして、2017 年 12 月 3 日に T の試合が石川多目的ドームで行われた。私たちが石川多目的ドームに到着し、メンバーに挨拶にいくと、E さんは「*いよいよだね*」と笑顔と緊張の入り混じった表情で話した。他のメンバーも、表情は柔らかいものの、緊張している様子だった。観客席を見てみると、観戦している客の年齢は様々だった。昔からの闘牛ファンのような年配の男性もいれば、若いカップル、子供連れの家族も多い。大会の前座として地元の小学生が、闘牛士の試合中の掛け声や仕草のモノマネをして会場を沸かせる、ということもあった。大会は 10 番戦で、T の試合は 7 番目だった。T の試合相手のウシの体重は 1t ほどで、T よりも 150kg ほど重く、体の大きさが一回り違うことが観客席から見てもわかった。T と相手のウシがリングに入場し試合が始まる直前、メンバーはリングを囲うようにして設置されている鉄柵に手をかけ、真剣な面持ちでウシを見つめながらメンバー同士で一言二言会話を交わしていた。そして、T と相手のウシが角を突き合わせ試合が開始すると、メンバーは皆身を乗り出し、B さん、E さんは何かを叫んでいた。通常闘牛の試合は 1、2 分ほどで決着することが多いが（注 4）、この試合は T と相手のウシが角を突き合わせ、5 秒ほど押し合った後、相手のウシが背を向け逃げだし、T の勝利が決まった。勝利が決まった瞬間、メンバーは皆リングになだれ込み、A さんと B さんは何かを叫びながら両手の拳を突き上げて喜び、D さんは飛び跳ねていた。その他のメンバーも笑顔でお互いに握手をしたりして、喜びを爆発させていた。その日の夜は牛舎にメンバーを含む関係者が集まり宴会が行われ、試合のビデオを見ながら盛り上がった。このように、試合までの興奮や緊張、勝利の喜び等様々な感情がグループで共有されていた。

3-5. グループメンバーとウシの関係

メンバーとウシとの間には、ある程度の距離感が存在していた。メンバーがウシの世話をする間、ペットの飼い主が自らのペットにするように名前を呼びかけるようなことはなく、淡々と世話をしていた。午後の世話のあと飲食をしている間も、メンバーは時々ウシの様子を見にいったり、サトウキビの草を補充したり、糞尿の処理はするものの、体をなでたりすることはなかった。私たちが、闘牛は懐くか、と尋ねた際も、B さんは「*絶対に懐かないよ。ペットじゃないからさ。牛の世話をするときも自分は飼い主だから大丈夫、とか絶対に思ってはいけない。いつも気をつけてる。3 メートルふっ飛ばされたこともある*」と真剣な顔で話し、F さんは「*闘牛は怖い。危ないよ。*」と話した。

沖縄県では、ほぼ全てのウシは、高齢になったりして試合ができなくなると、と殺場で殺され、「牛汁」というウシの肉を煮込んだ沖縄特有のスープ料理に調理され、牛主やその家族、関係者によって食べられるのが一般的である。グループ R も例外ではない。私たちが、ウシを可愛そうと思うか、と E さんに尋ねると、E さんは「*ペットじゃないからね。終わる時は終わる*」と話した。このように、牛主は、人が犬や猫等の愛玩動物に持つような感情をウシに持つことはなく、牛主にとってウシはあくまでも、闘牛をするための動物なのである。

3-6. 闘牛の観光化に対するグループメンバーの視点

最近、沖縄県、特にうるま市では闘牛が観光資源として注目されていると思うが、このような状況を当事者である牛主たちはどのように考えているのかという質問に対して、A さんは「*闘牛はあくまでも僕ら地域の人たちの娯楽だから、その延長線上に観光を乗せている感じ。観光客が来るぶんには構わないけど、それに合わせて大会の環境を整備するのはなかなか難しいね。大会自体も 3 時間くらいあるから、長いし。*」と答えた。この発言からうかがえることは、闘牛が行政から観光資源として注目されていることを理解しており、観光客の受け入れを拒否するわけではないという消極的な態度であることだ。さらに、牛主たちにとっての闘牛は、あくまでも自らの楽しみや興奮のためのものであるという点が強調されている。

4. 考察

本研究は、沖縄県の牛主にとって闘牛に伴う経済収支がマイナスであることを示した。大会で勝ったウシは価格が上がるので、このウシを売れば多少の収益になる。逆に、ウシが試合に負けると価格は下がり、大きな損害となる。そのうえ、ウシは試合に負けると精神的に弱くなり、以降の試合でも勝てなくなることが多い。だから、牛主は試合でウシを勝たせなければならない。これは、先行研究で報告された、隠岐の島、宇和島、徳之島の牛主でも同じであった（石川　2005、2013）。

沖縄でみられたグループ育成のメリットの１つは、経済的な負担の軽減である。本研究のグループ R では、メンバーのすべてが闘牛以外の生業を持っていた。「同好会」と呼ばれる共同育成組織をもつ島根県隠岐の島でも、牛主のほぼ全員が闘牛を生業にしていなかった（石川　2005）。闘牛以外の収入源があるといっても、沖縄の場合、個人で牛主をすれば月々数万円かかるわけである。その経済的負担を、グループ育成の場合には月々１万円に軽減できるというのはメリットだといえよう。また、メリットの 2 つ目として、毎日のウシの世話の軽減をあげることができる。鹿児島県徳之島では牛主はウシの育成に毎日 1-2 時間（曽我　1991）、鳥取県隠岐の島では平均 2-3 時間を要すると報告されている（石川　2005）。本研究でも、餌のサトウキビの草刈りや、牛舎の掃除、ウシの散歩等の世話として毎日 2.5 時間程の時間が牛主に要求されていた。だが、牛主が仕事を他所に持っていれば、ウシの世話に費やすはずの時間に仕事上の（時には、私的な）用事が入ることもあるだろう。たとえそういう場合であっても、グループ育成だとメンバー間でウシの世話を調整できるというのは非常に大きなメリットである。つまりグループ育成には、牛主への経済的、労力的負担を軽減するメリットがあったわけである。さらに、もちろん、試合相手が決まれば、相手のウシを研究する必要がでてくるため、個人で牛主をする場合は 1 人分の情報しかないが、グループ育成の場合はより多くの情報が集まる可能性が高いというメリットもある。

しかし、ウシのグループ育成が牛主の経済的、労力的負担を軽減するといっても、それらが無くなるわけではない。それなのに、なぜ牛主はウシを飼い、闘牛を続けるのだろうか。石川（2005）は、牛主にとって、経済的なマイナスを超える楽しみがあるといい、ウシの飼育と牛主同士のつきあいの 2 つの理由をあげた。１つ目のウシの飼育については、独自の方法で毎日 2 － 3 時間世話と訓練をしてウシを強くしていくなかで、ウシが答えてくれることに牛主は満足感を得るというのだ。愛媛県宇和島地方の牛主はウシの体を磨くことを「なでる」と表現し、体を綺麗にすること以上に、ウシに触れ、話しかけることが重要だという（石川　2004）。鹿児島県徳之島の牛主は畳を牛舎内に持ち込み、ウシと共に

就寝する（曽我　1991）。鹿児島県徳之島の闘牛を題材にした小説『闘牛』（小林　2011）には、牛主がウシを「坊」と愛称で呼び、牛主がウシに愛情を注いでいる様子が描かれている。徳之島では、子どもに対するような気持に似ていると石川（2013）は記載している。そして、徳之島では、連続して２－３回負けたウシは売らなければならないという暗黙のルールもあるらしい（石川　2013）。一方、本研究のグループＲのメンバーはウシに話しかけることはなく、愛玩動物とは違う動物だと語り、ウシと牛主の間にはある程度の距離感が存在した。最後にはウシを肉として食することもある。そこには沖縄県ならではの動物観が見える。牛主にとってウシはあくまでも闘牛をするための「モノ」なのかもしれないという点が他所の地域とは違っている。

２つ目の牛主同士のつきあいについて、本研究では１つのグループしか調査をしていないため、異なるグループの牛主間の関係は不明である。だが、グループ内のメンバーのつきあいは濃密である。牛主は、試合で勝利することを目標としているので、試合が決まると牛主は興奮し、緊張する。なぜなら、自分の育成したウシが勝利することは大きな喜びであるし、勝利すればそのウシの価値が上がるからだ。しかし試合に敗北した場合には、ウシが戦意を喪失したり、ケガを負ったりする等のリスクも存在する。そのような試合までの緊張や興奮を共有できる仲間がいることは心強いに違いない。だが、メンバーは自分達のウシが勝利した瞬間は喜びを爆発させるが、その瞬間は文字通り一瞬である。それよりも日々の餌やり、牛舎の清掃、訓練、糞尿の処理に要する時間の方が圧倒的に長い。いくら勝利の瞬間のために日々の世話を行っているとはいえ、日々の世話に意味や楽しみを見出せなければ、牛主を続けることは難しいのではないだろうか。彼らは日々牛舎に集まり、ウシの世話をし、飲食しながら闘牛の話しをし、大会までの興奮・緊張を共有し、自分達のウシが勝利した喜びを分かち合う。「勝利の瞬間」以外の部分にこそ彼らは価値を見出しており、それが彼らがグループを組む理由だと考えられる。徳之島でも、牛の世話をする人だけでなく、その妻、勢子、手伝ってくれる友人など多くの仲間と家族ぐるみで感情を共有できることが、ウシの勝ち負け以上に、牛主の原動力になっているという（石川　2013）。それでは、「気の合う仲間と飲食をし、共通の目標に向かって日々を過ごすための手段」として、人が闘牛を選ぶ理由は何なのだろう。その理由の１つは、沖縄県うるま市を初めとした闘牛の盛んな地域では、闘牛が地元住民の娯楽として生活に組み込まれていることをあげることができる。大会にはお年寄りから子供まで様々な人が訪れる。本研究で示した、大会の前座として、地元の小学生が闘牛士の試合中の掛け声や仕草のモノマネをして会場を沸かせるように、地元の子供達にとっても闘牛は身近なものである。このような環境の中で育つことによって、ある者は大人になって新たな牛主となり、牛主が再生産されるのではないだろうか。つまり、沖縄県で闘牛が地元の人々の娯楽として行われてきたことにより、この牛主の再生産のサイクルが存在し、沖縄県は日本の他の地域に比べて闘牛が盛んに行われているといえるのかもしれない。今後の課題として、沖縄県内のグループ数、その増減、そして他グループにおけるウシ育成の様子を明らかにすることがあげられる。楽しませてもらった動物が最後をどう迎えるのかは、関わった人たちの動物観が関係する。ウシは産業動物であるから最後は食肉とされることが多いだろうが、楽しませてもらった動物を自分たちで食べるということからどのような動物観が描き出されるのかについても今後の研究が望まれる。

最後に、闘牛の観光化について触れておこう。ここでは、動物愛護の観点からの闘牛の是非については言及しない。また、地域文化あるいは伝統文化に観光が関わることで生じてきた様々な質問、例えば「何をもって文化とするか（文化の真正性）」、「誰にその文化を語る資格があるか」、そして「新たに作り上

げられた文化（文化の客体化によって作り出された文化）は真正であるか」についても多くの討議がなされており（i.e., ギアーツ　1987、山下　1992、太田　1993）、それは本稿の目指すところではないためそちらに譲りたい。現在、程度の差はあるが、日本の闘牛開催地は観光客へその地域の闘牛の歴史や大会情報を提供している。各地域の闘牛に対する観光の関わりは、石川が一連の研究で報告している。例えば、宇和島では、生業の中で必要性が少なくなった牛の減少とともに闘牛も減少し、それが観光化によって復活した（石川　2004）。隠岐の島も、宇和島とほぼ同様の経緯をたどった（石川　2005）。新潟県二十村郷では、かつて山古志村の村おこしに関わった宮本常一がウシの角突きを観光資源候補としてあげたことが知られている（山古志村写真集制作委員会　2007）。その後この地域は 2004 年の 10 月 23 日におきた新潟県中越地震による被害を受け、後の復興のなかで策定された「やまこし夢プラン」で観光についての言及がみられ、オーナー募集など闘牛の存続がおこなわれてきた。2018 年 5 月には、それまでの女性禁制が解禁された。清野（2016）は、山古志の観光への取り組み基盤が過疎化対策というより、災害支援を受けた際の外部の人とのつながりと感謝にあると説明する。一方、徳之島では行政からの恒常的な経済支援は行われていない。観光と関わらなくても、担い手が闘牛に持つ誇りと大会に訪れる住民のつながりの中で娯楽として闘牛が完結できている点は（石川　2008）、地域文化の望ましいモデルであるといえるだろう。だが、観光事例調査の結果は参考にはなるが別の地域でも同様の結果になるとは限らず、各地域に応じた施策が必要であるというのが近年の観光事例に対する指摘である（i.e. 奥井　2018）。徳之島の闘牛文化が現時点で成功しているのは、観光業より農業に力点が置かれてきたことに由来する（石川　2005）。一方、沖縄県の基幹産業は観光であり、2018 年に至るまで毎年観光収入も観光客も増加が続いているものの、さらなる観光振興を県は目指している（沖縄県　2017）。そのなかで新たな観光資源が必要になる。また、観光資源の少ないうるま市は、市の HP に闘牛のページを開設するなど、闘牛を観光の目玉としたいと考えている。沖縄県における闘牛と観光の関りがどのようになっていくかは将来を待つしかないが、本稿からみる牛主たちの意識には観光は大きな割合を占めているとはいえない。とはいえ、徳之島とは違い、観光化の影響を避けて通るのは不可避であろう。観光客にとっての異文化接触があくまで疑似体験であるとすれば、それは現在行われている闘牛とは別ものを催行すべきなのかもしれない。例えば、宇和島で実施されている、通常 20 － 30 分かかると言われる 1 回の試合を 5 － 6 分に短縮し、負けるウシのダメージを避けて引き分ける、観光闘牛という形式は 1 つの方策かもしれない。宮本 (1965) が「地域開発というものは、本当に自分たちの土地をどうしたらよいかという人たち、真剣に自分たちの土地の問題を、自分たちで解決しようという人たちが育ってこない限り、ありようがない」と問題提起したように、闘牛を資源とした観光による地域開発を計画するならば、闘牛に関わるすべての関係者が状況を理解し、一緒になって将来に向けた決定をしていく必要があるだろう。

注釈

注 1　本研究では、曽我（1991）に従い、闘牛に使われる牛をウシと表記する。

注 2　競馬の場合は、馬の速さが遺伝すると言われているため、2 世も頻繁につくられるが（及川 2002）、ウシの場合は親のウシの強さが必ず子の牛に受け継がれるわけではないため、あまり行われていない。

注 3　牛主は一般的にそれぞれ闘牛とは別の仕事を持っているため、牛主が仕事中である昼間は、牛舎は施錠される。

注 4　闘牛の試合は、ウシ同士が角を突き合わせた瞬間から始まる。数分で決着がつくことが多いが、角を突き合わせた瞬間に片方のウシが逃げ出し数秒で決着がつく場合や、逆に 2,30 分間試合が続くこともある。

注 5　石川（2005）の定義によると、観光客のために臨時で行う闘牛であり、観戦料を徴収し、出場ウシの給金として分配する。ウシは 5 － 10 分闘わせた後、勝負がつく前に引き分ける。

後注

本論文で掲載している写真はすべて、池本倫太郎によって撮影された。

参考・引用文献

青木人志、1998、「動物愛護と伝統の狭間」『一橋論叢』119：pp. 16-33.

ギアーツ・C、1987、『文化の解釈学〔１〕〔２〕』（吉田禎吾ら翻訳）岩波現代選書.（Geertz C. 1993, The Interpretation of Cultures, Fontana Press, p356）

広井忠男、1998、『日本の闘牛』高志書院 .

池谷和信、2013、『生き物文化の地理学』海青社.

石井浩一、1992、「愛媛県における闘牛興行の復興過程に関する研究」、『スポーツ史研究』5: pp. 25-35.

石川菜央、2004、「宇和島地方における闘牛の存続理由」、『地理学評論』77: pp. 957-976.

石川菜央、2005、「隠岐における闘牛の担い手と社会関係」、『人文地理』57: pp. 22-43.

石川菜央、2008、「徳之島における闘牛の存続と意義」、『地理学評論』81: pp. 638-659.

石川菜央、2011、「徳之島の闘牛における観客の動向と今後の可能性」、『広島大学総合博物館研究報告』3: pp. 89-96.

石川菜央、2013、「闘牛をめぐる人々の牛に対する認識：「楽しい」という感情の源を求めて」、『生き物文化の地理学（池谷和信　編）』pp. 97-120.

謝花勝一、1989、『ウシ国沖縄・闘牛物語』ひるぎ社 .

小林照幸、2011、『闘牛』新潮社 .

国頭郡教育会編、1919、『国頭郡志』沖縄出版会.

桑原季雄、尾崎孝宏、西村明、2006,「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状予備調査報告２－八重山調査より」、『鹿児島大学法文学部紀要　人文学科論集』64：pp. 51-83.

真境名安興、1967、『沖縄現代史』琉球新報社.

宮城邦治、2010、「島人を魅了するウシオーラセー～沖縄闘牛の歴史と人々を魅了した大会～」、『しまたてぃ』52.

宮本常一、1965、「社会開発の諸問題」、『日本の中央と地方』pp. 165-194.

西村明、桑原期季雄、尾崎孝宏、2006、「沖縄、徳之島および宇和島の闘牛に関する比較研究」、『南太平洋海域調査研究報告』46: pp. 167-179.

西村明、桑原期季雄、尾崎孝宏、2007、「東アジアにおける闘牛と「周辺―周辺」ネットワークの形成」、『South Pacific Studies』27：pp. 53-72.

農林水産省、2018、「世界の穀物等の価格動向」、http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/annual/2016/attach/pdf/2016_annual_report-24.pdf（最終閲日覧 2018/1/21）

及川正明、2003、「優秀な競走馬を生産するための種雌馬の要因」、『馬の科学』40: pp. 54-56.

沖縄県総合事務局農林水産部、2018、「沖縄の畜産の概況」http://ogb.go.jp/nousui/seisansinkou/sinkou/chikusan/gaikyo/h29gaikyo_1.pdf（最終閲覧日 2018/2/5）
沖縄県、2017、「第 5 次沖縄県振興基本計画改定版（平成 29 年 3 月改定）」http://www.pref.okinawa.jp/site/ 最終閲覧日 2018/2/5）bunka-sports/kankoseisaku/documents/kankoshinkokihonkeikakukaitei.pdf（最終閲覧日 2018/9/10）
奥井健太、2018、「持続可能な観光政策のあり方に関する調査研究」http://www.mlit.go.jp/pri/houkoku/gaiyou/pdf/kkk146.pdf（最終閲覧日 2018/9/10）
太田好信、1993、「文化の客体化―観光をとおした文化とアイデンティティの創造―」、『民族学研究』57: pp. 383-410.
清野隆、2016、「山古志村における震災復興と都市農村交流：支援から交流への転換とグリーンツーリズムの深化」、『CAST 叢書』9: pp. 97-114.
曽我亨、1991、「徳之島における闘牛の飼育と、その分類・名称・売買の分析」、『日本民俗学』188: pp. 1-48.
徳之島「島生活」、2017、http://tokunoshima.today/blog/experience/bull.html（最終閲覧日 2017/1/25）
宇和島観光物産協会、2018、https://www.tougyu.com/togyu-index2/（最終閲覧日 2018/9/10）
宇和島闘牛公式サイト、2018、https://www.tougyu.com/（最終閲覧日 2018/1/25）
山古志村写真集制作委員会、2007、『ふるさと山越に生きる―村の財産を生かす宮本常一の提案』農山漁村文化協会.
屋良ビデオ、2017、http://www.tougyuu.com/puroguramu.htm（最終閲覧日 2017/12/9）
山下晋司、1992、「『劇業国家』から『旅行者への楽園』へ」、『国立民族博物館研究報告』17: pp.1-33.
全国闘牛サミット協議会、2017、http://fish.miracle.ne.jp/mou-mou/（最終閲覧日 2017/12/4）
AFPBB News, 2018,「2011. バルセロナで最後の闘牛 来年 1 月から禁止」http://www.afpbb.com/articles/-/2830643（最終閲覧日 2018/1/25）
“Battle of the Queens – Switzerland’s Ultimate Cow Fighting Championship” ODDITYCENTRAL, 2018, http://www.odditycentral.com/events/battle-of-the-queens-switzerlands-ultimate- cow-fighting-championship.html（最終閲覧日 2018/1/31）
BBC news, 2016, Will Spain ever ban bullfighting? http://www.bbc.com/news/world-europe-38063778 （最終閲覧日 2018/1/25）
don quijote, 2018, https://www.donquijote.org/mexican-culture/traditions/bullfight-mexico/ （最終閲覧日 2018/1/25）
Jack Kurtz: Photojournalist & Travel Photographer, 2018, https://kurtzjack.photoshelter.com/image/I000048QmMAsIdoM（最終観覧日 2018/1/25）